失われた時代

1930年代への旅

長田　弘

筑摩叢書 341

筑摩叢書　341

失われた時代

1930年代への旅

長田　弘

筑摩書房

長田　弘（おさだ　ひろし）
1939年，福島市に生れる。詩人。
詩集に『食卓一期一会』，『深呼吸の必要』，『言葉殺人事件』（ともに晶文社）など，著書に『詩と時代 1961—1972』（晶文社），『詩人であること』，『読書百遍』（ともに岩波書店），『見よ，旅人よ』（朝日選書），『私の二十世紀書店』（中公新書），『一人称で語る権利』，『笑う詩人』（ともに人文書院）などがある。

失われた時代　1930年代への旅　　筑摩叢書 341

1990年 1 月 20 日　初版第 1 刷発行

著　者　長　田　弘
発行者　関　根　栄　郷
発行所　株式会社 筑摩書房
東京都台東区蔵前 2－6－4
電 話　東京5687-2680（営業）
東京5687-2670（編集）
振 替 東 京 6-4123
郵 便 番 号 111-91

Printed in Japan
©1990 H. OSADA

ISBN4-480-01341-5　C0036　　三松堂印刷・永興舎

乱丁・落丁本の場合は，ご面倒ですが，小社読者係宛に
ご送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

失われた時代　目次

カタルーニャ幻影行　1
——ジョージ・オーウェル　一九〇三—一九五〇

ある詩人の墓碑銘　67

スペインの小さな村　69
——ジョン・コーンフォード　一九一五—一九三六

イギリスの小さな町　101
——ケンブリッジ　一九〇〇／一九一五

墓地——死後の生　143

ビスナールの死　145
——フェデリーコ・ガルシア・ロルカ　一八九八—一九三六

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

国境の墓　165
——ヴァルター・ベンヤミン　一八九二—一九四〇
オードリュイクまで　188
——ポール・ニザン　一九〇五—一九四〇
ペレジェルキノ　220
——ボリス・パステルナーク　一八九〇—一九六〇
アウシュヴィッツにて　269
——オシフィエンツム　一九七一
後記　283

カタルーニャ幻影行

ジョージ・オーウェル　一九〇三―一九五〇

すさまじいほどにさまざまな石塊の点在する台地だった。風も、叢林もない。鈍いろの光りにしずんだ石だらけの台カ原のなかに、わずかに乾いた砂をかぶっただけの道が一本、曲がりくねってのびている。暴れ馬のように石をすべって車がひどく腹を擲つたびに、激しくハンドルをとられた。

一抱えもある石塊をいくつものぞかせるだけで、優しい気配をまったくもたない風景のなかに、朽ちてまぎれてしまったような廃屋が低く、ぽつんと散らばっている。絞首台のような枠木がひとつ、石塊と雑草のあいだに枯れて立ちつくしている。

いや、それらは、廃屋ではなかった。しばらく走ると、石塊をていねいに脇にのけて、まわりに積んで、人影のない荒地のなかにわずかな斜面を拓いた畑があらわれ、老いた男と女と子供たちがうずくまって、それぞれが腕いっぱいの雑草を抱えていた。黒い服の娘が微かに頭をあげ、わたしの車をぼんやりとみる目をみた。痩せた騾馬が一頭、かしぐように、石の土地をすすんでいた。

廃屋とみえるもののほかに、家らしい家がなかった。賽の河原、という言葉をとっさにおもいだしていた。荒々しい貧しさのほかになにもなかった。それが、わたしにとってアラゴンのはじまりだった。

ついいましがたまで、わたしは、カスティーリャのどこまでものびた葡萄畑を横切る、緑に染みたワインランドの快適な舗装路を、アルバセーテから飛ばしていたのだ。スペインでは、道をひとつ曲がるたびに、からくりのようにいきなり風景が変わる。

「スペインの風景は神がおそらく若いときに、絵筆の使いかたや石の積みかたもロクに知らないころに描いたのです」と、スペイン市民戦争（一九三六年―三九年）の敗北のさなかに悲惨に死んだスペインの詩人アントニオ・マチャードはいった。スペインのすべては、マチャードのいう神の習作時代の作品であるスペインの風景であり、地形であり、大地だ。スペインですでに二千キロちかく走ってきて、そのことをわたしはしたたかに知ったし、またふかく魅せられていた。にもかかわらず、アラゴンで最初に突切らねばならなかったこの荒涼たる貧しさは、不意うち、としかいいようのないものだった。

アラゴンへの旅は、わたしには、イギリスの作家ジョージ・オーウェルの『カタロニア讃歌』への旅だった（『カタロニア讃歌』一九三八年、邦訳六六年現代思潮社、七〇年筑摩叢書）。スペイン市民戦争の記事を書くためにスペインにやってきたオーウェルが「当時のあの雰囲気のなかではそうすべきとしかおもえなかった」ために、一民兵としてマルクス主義統一労働者党（ＰＯＵＭ）の組織した民兵隊にくわわってアラゴン戦線におくられたのは、一九三六年から三七年にかけての冬、スペイン市民戦争がは

じめてむかえなければならなかった冬のことである。

いまはオーウェルの『カタロニア讃歌』の時代ではなく、スペイン市民戦争の勝者の独裁の下にある時代の初夏で、事件としての歴史は確かに過ぎさっていた。旅にでるまえ、わたしのなかに、いまあらためて『カタロニア讃歌』の今日への旅をえらぶことはたんにタイム・トラヴェラーの感傷に終わるのではないか、という危惧が一どもはたらかなかった、とはいえない。だが、歴史はわたしたちにとってたんなる時の経過にすぎないのではないというおもいを、わたしはじぶんに斥けたくなかった。初めてのアラゴンの不意うちの表情は、しかし、わたしのなかにあったそのような逡巡をきつくうばった。

「アラゴン地方の村はみな、きたなくて貧しい。平和の時でも、この地方を旅行すれば、その貧しさに心打たれぬわけにはいくまい。村は砦みたいにできあがっている。教会を中心にして貧弱な泥と石の家々が固まっている」(『カタロニア讃歌』の引用は以下＊、筑摩叢書版による)。

道がやがて賽の河原の大地をジグザグに急角度に下って、トゥリア河沿いの谷間の、テルエルへの細いおだやかな舗装路にはいったあとも、わたしは、オーウェルが市民戦争の時代の冬にしるしたこのアラゴンの「貧弱な泥と石の家々」が、そのままにわたしのアラゴンの第一印象をまっすぐにつらぬいているのを、かんじた。「平和の時でも」という言葉が、痛いほど正確だった。

テルエルは、坂の街だった。街全体が坂のうえに斜めにひろがっていた。テルエルは、スペイン市民戦争においてもっとも激しく攻防の繰りかえされた山間の暗い、ちいさな都市である。毎年、冬になるとその年のスペインの最低気温が記録される、といわれる。市民戦争が勃発した当初から、この

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

街は共和国側とナショナリスト側とのもっとも熱い接点であり、境界だった。テルエルが最終的にナショナリストの支配に陥ちたとき、三年にわたったスペイン市民戦争はいっきにその終焉にむかったのだ。

街は午後の休みにはいっていて、商店はシャッターをばたんと降ろしていて、暑さが人の気配をきびしく街路から消していた。この街のサン・ペドロ教会にミイラとしていまも保存される「テルエルの恋人たち」の陰鬱な伝説をつたえる金いろの絵葉書が、幾枚も、鉄格子のはまったショーウィンドーのなかで鈍く光っていた。坂のうえの広場にたつと、以前みたスペイン市民戦争当時の記録写真の情景が、視野いっぱいにひろがってくる。黝ずんだ建物も、てっぺんで一頭の熊が吼えている灰いろの円柱も、そこにあった。スローガンを掲げた巨大な垂れ幕と古い銃をかついだ民兵たちの姿だけが、そこになかった。午後の陽射しがまあるく静かに落ちているテルエルで、わたしは、テルエルからハカにまっすぐ北に走る、いまはみえないアラゴンの最前線にはいった。

アラゴン戦線は、当時、テルエル前線、サラゴサ前線、ウエスカ前線という三つの前線に分かれていた。オーウェルがくわわったのは、はじめはサラゴサ前線であり、あとはウエスカ前線である。テルエルからウエスカ前線へ、サラゴサをとおる国道をとる。ナショナリスト側がサラゴサとテルエル前線をむすぶ重要な補給路として確保しつづけたこの道を、オーウェルはとおっていない。

夕闇がいつのまにか追いかけてきていた。明るい夕暮れのなかに、丘が幾つも重なってはしった。緑が消え、淋しい灰茶いろの岩山のあいだに、低い樹叢がどこまでも点々とつづく。サラゴサがみえてきた。その外延がほとんど林立する公営住宅にかこまれているのは、今日のスペインのどこの大都

市ともおなじだ。

道は、近代的な高層建築がそそりたつ影のように立ちならぶひろいエスパーニャ通りにはいって、スペイン市民戦争にながく関心してきたわたしにはすでに親しいエブロ河にでる。濁った流れがうねるエブロ河畔に、夕陽を翳らせてむっくりと立っているのが、ピラール大聖堂なのだろう。外容はあまり美しいといえないこの、スペインのカトリックには特別の意味をもつとされる大聖堂への、共和国側による三六年八月の爆撃が、ナショナリスト側への教会の加担をふかくつよめる結果になったことは、知られている。しかし、スペイン市民戦争の物語『希望』において、フランスの作家アンドレ・マルローがすばやく書きとっていたように、スペイン市民戦争が「キリストは成功したアナキストですよ。成功したのは、キリストだけですよ。ところが坊主はそうはいかぬ。三万の人びとを逮捕し、拷問にかけたり何かしたのを愛の名で是認した教会なんか、みんな燃しちまってかまわない」という声をもっていたことは、いまはほとんど忘れられている。

わたしには、「精神生活と、カトリック・スペインの精神の自由のために、ぼくはたたかっているのだ。悲しむべきことには、教会は私欲をささえ、物質主義を代表し、政治に介入することによってひとつの特権階級の利益を代表し、ぼくたち人民の精神的成長に反対するために、その権力をほしいままにしているのだ」と、イギリスの詩人スティーヴン・スペンダーにこたえたスペインのカトリック詩人ホセ・ベルガミンの苦い抗議の低い声が、ピラール大聖堂のゆっくりとした鐘の音のなかに痛ましく重なって、聴こえてくるような気がした（「スペインは世界の作家を招く　Spain Invites the World's Writers」「ニュー・ライティング」四号、一九三七年）。

「夜中には、サラゴサからくるファシスト軍のトラックの灯がみえた。サラゴサは、南西十二マイルほどのところにみえる。それは、船の舷窓の灯のような、細く並んだ明りの列だった。政府側の軍隊は、一九三六年八月以来、この距離からそれをみつめつづけてきて、いまもみつづけている」(*)。

オーウェルは、このサラゴサにくることはできなかった。サラゴサはスペインのアナキズムの本拠地のひとつでありながら、スペイン市民戦争の初めから終わりまでついに共和国側が奪回できなかった都市だったのである。道は、エブロ河岸で左右に分かれ、サラゴサ前線への道は、右に市街を巻いてゆく。夜、暗く重い水の流れのみえる河岸にたって、オーウェルの眼差しとは逆の方角から、サラゴサ前線のほうをみた。仄明るい闇のほか、何もみえなかった。

翌日、朝がまだ乾いた布地の手ざわりをのこすうちに、サラゴサをでた。

スペインは、街の終わるところから、丘陵地帯がはじまる。市街がつきると、道はいきなり左に、岩塊だらけの山地のあいだにはいった。たったいままでぶあつく実在していた都市が、信じられない唐突さで、幻に変わる。

鋭い瘤のように盛りあがった丘に、低く地面を這う褪せた緑のかたまりが、白灰いろのぼろぼろの岩肌に、ばらばらと摘み捨てたように散らばっている。それは、ちょうどいくつもの腫れあがった巨大なゴマ塩頭の頭部だけが、目をじっと大地に埋めて、不規則に整列しているようなのだ。穏やかな日本の風景をみなれた目には、ひどく生々しく、しかしどこまでも無機的にかんじられる、むきだしの不毛さに覆われた異形の風景としか、いいようがない。

瘤地のつづく台地のへりにしがみつくようなかたちのペルディゲラの村はずれで、道は突然台地を滑りおちた。そこから、おなじような瘤地をあつめた次の台地の端に位置するレシニェナまでのひろびろとした平らな畑地のまんなかを、道はほとんど一直線にのびている。この展けた平地と、そのへりに無造作に立ちあがっている一群の丘とが、いまはないサラゴサ前線だった。ペルディゲラがナショナリスト側の、レシニェナが共和国側の前線基地だったのだ。

「いま、ぼくはアラゴン戦線の丘の頂上にいる。まわりは、緑の灌木と、あいだにちょぼちょぼと畑野があるきわめて荒々しい岩山ばかりだ。二キロほど離れた村は、敵の手中にある。おおきな教会につきものの灰いろの石。敵の姿はまったくみえない。ときどきライフルで撃ってくるだけ。一度機関銃が炸裂した。飛行機も一、二度飛んできた。わが軍の銃撃もときどき遠くからきこえる。ただただ太陽のみ熱く照りつけていて、ぼくはもう病気になりそうだ。なにも口にはいらないし、まったくうごけやしない。まったく何もすることがない。ぼくらは一日じゅうごろごろしている。夜に二時間、見張りに立つだけだ。昨日の夜は、何マイルもむこうのサラゴサのほうで稲妻が光って、とても素敵だったぜ。外で、石のうえに毛布一枚だけで眠るんだ。昨夜は雨が降ったけど、毛布に滲みこんでくるほどじゃなかった。いったいぼくらはいつまでここにいるのだろうか。朝――日曜だ――まだ暑くならないうちに敵の占領しているペルディゲラの村の鐘が、とってもゆっくりと哀しげに、はるばるこっちまで響きわたってきた。どうしたわけか、その鐘の音はこれまでになくぼくをひどく意気沮喪させた。でも、いまはぼくは落着いてきた。好むと好まざるとにかかわらず、ぼくは参加したのだ。このことは、ぼくの気に入った」。

オーウェルとおなじ年の夏スペインにきて、このレシニェナでおなじPOUMの民兵隊にくわわって、その冬コルドバ戦線に転戦して死んだイギリスの若い詩人ジョン・コーンフォードは、一九三六年八月、レシニェナからロンドンの恋人にあて、こう書きおくっている（パット・スロウン編『ジョン・コーンフォード／追想 John Cornford, A Memoir』一九三八年、ケイプ社）。

レシニェナの村の入口からペルディゲラをふりかえると、むこうの台地に細く、まっすぐに教会の灰いろの塔がみえた。たったこれだけの距離が、どこまでも、たがいをへだてたのだ。共和国側もナショナリスト側も、この「鐘の音が、とてもゆっくりと哀しげに、はるばると響きわたってくる」距離を、およそ二年ものあいだ、決定的にせばめることができなかった。

スペイン市民戦争において、その戦争の性格をふかく決めたのは、「神がおそらく若いときに、絵筆の使いかたや石の積みかたもロクに知らないころに描いた」スペインの地形だ。ビルバオへの道が、グアダラマの山地が、トレドが、コルドバ戦線が、グラナダとマラガをへだてる山塊が、そしてテルエルが、そうだった。「まず第一に、地形の問題があった。戦線は、わが軍もファシスト軍も、自然の要害にまもられていた。たいてい一方からしか近寄れない位置にあった。こういう場所は、塹壕がいくつか掘ってありさえすれば、よほどの大軍に押しかけられないかぎり、歩兵に攻め落とされることはない。ぼくらの陣地だって、ちかくの陣地はどこでも同じだったが、一ダースの兵隊と機関銃二挺さえあれば、一個大隊の歩兵を寄せつけなかったろう」（*）。この何もないサラゴサ前線の現在が、いまあからさまに、むきだしに、オーウェルのこのような言葉にひそめられているスペイン市民戦争の本質をみずから正確に語りだすのを、わたしはあらためてまぶしいほどにかんじた。

スペイン市民戦争について、スペイン「内戦」とせず、スペイン「市民戦争」とするのは、それがあくまで人びとの戦争だったことを、記憶にはっきりととどめておきたいからだ。

わたしは、スペイン市民戦争を、戦争期にも戦後にも一般におこなわれてきたように、ナショナリストの軍隊（徴発された民兵をくわえた）対共和国の軍隊（国際義勇軍と民兵隊をくわえた）といういわゆる正規戦だった、とかんがえない。「イギリスのどのパブリック・スクールの軍事教練だってずっとましな近代軍らしい装備でおこなわれている」というようなスペイン市民戦争においてたたかわれたのは、ふつういわれてきたように、人民戦線と反乱軍とのあいだのたたかいでは、けっしてなかった。それは、スペインでの、ナショナリストに指揮された共和国正規軍のクーデタによる軍事革命と、それへの抵抗をささえた共和国市民の武装化のなかではっきりしたかたちをとって生まれつつあったいわば対抗革命（カウンター・レヴォリューション）とのあいだのたたかいだった。立場の見かたに終始するスペイン市民戦争のおおくの資料自体が、おのずから立場の偏見を突きやぶってそのことを示唆するが、それにもましてスペイン市民戦争の戦線の現実の地形は、この戦争が本質的に人びとの戦争としての「内戦」としてたたかわれた、今日にいうゲリラ戦だったことをみずから語っている、とわたしにはおもわれた。

*

スペイン市民戦争においてもっともまちがいやすいのは、それを反ファシズム人民戦線という視点からあっさりと割り切ってしまう姿勢であるだろう。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com